

源氏物語

橋田壽賀子

下の巻

源氏物語

藤原
橘田壽賀子

下の巻

橋田壽賀子

1925年（大正14年）、韓国ソウル生れ。

日本女子大、早大文学部卒業後、松竹脚本研究生となる。1959年フリーとなってテレビドラマの脚本に専念。「愛と死を見つめて」「ただいま11人」などで人気作家に。嫁と姑の問題を新しい時代状況から描いた「となりの芝生」や人間の老いを見詰めた「夫婦」で“橋田調”を確立。NHKテレビ小説「おしん」（83年）や同大河ドラマ「おんな太閤記」（81年）、「いのち」（86年）、「春日局」（89年）などのヒット作を生み、幅広い視聴層を捉えている。94年春からは9年ぶりにNHK連続テレビ小説「おんなは度胸」を担当する。

※本書はTBS創立40周年記念番組 橋田壽賀子スペシャル「源氏物語」の原作脚本をもとに諸田政一氏が小説化したものです。

源氏物語（下の巻）

一九九一年十二月一日 初版発行

著者——橋田壽賀子

©Sugako Hashida, Printed in Japan, 1991

発行者——栗原幹夫

発行所——KKベストセラーズ

東京都新宿区大京町二丁目番地 〒160 電話 03-3355-9111 振替東京1206

印刷所——新井印刷 製本所——ナショナル製本 版下制作——大文社

ISBN 4-584-18127-6 C0093

源氏物語
下の巻

源氏物語 ● 下の巻 — もくじ

梅
壺

7

明石
姫

43

雲井
雁

71

玉か
ずら

101

明石と紫

145

女三の宮

163

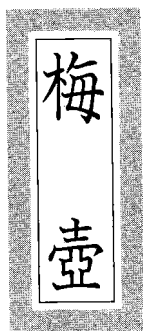
終の章

215

装丁／野村高志
題字／矢萩春恵
イラスト／東 忠夫

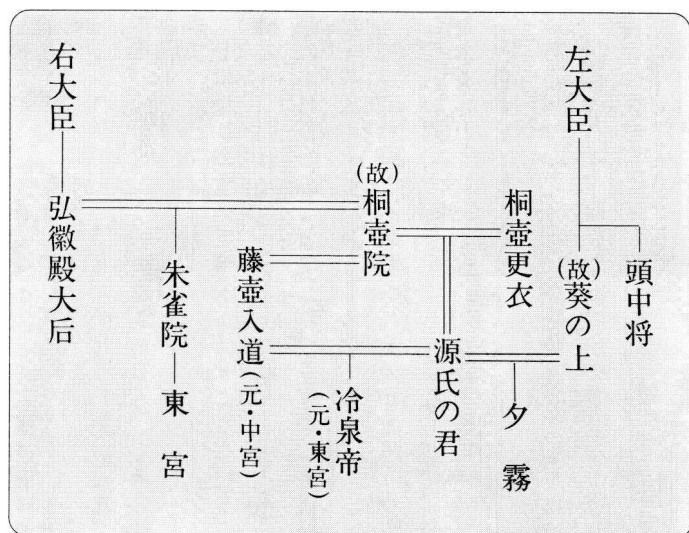
輝くばかりのお美しさゆえ光君と呼ばれ、数多の女人との恋の遍歴を繰り返された青春時代の源氏の君。しかし帝のお子でありながら、臣下に降られ、想いをお懸けになられた藤壺中宮とのお子、東宮には父君としての名乗りもお出来にならない……源氏の君のお心にはいつも満たされぬ思いがおりだったのでございます。

私に、この物語を書くようおすめになられた道長さまは、もうすっかり源氏の君のお身の上にお心を奪われている様子。お手を叩かれたり、袖を目に当てられたり、一喜一憂して下さるの、私の筆にもおのずと力が入ろうというもの。私もこうしてはいられません。早速続きを書き進めて参ることにいたします。



父帝桐壺院が崩御なされたあと、右大臣家から桐壺院の女御となられた弘徽殿太后のお腹
 のお子、朱雀帝の御代になり、宮中では右大臣家が権力を握って、左大臣家は勢力を失い、
 左大臣家の姫、葵の上の婿となられた源氏の君には長い不遇のときが続いておられました。
 そのうえ、弘徽殿太后は、かつて、源氏の君の母君、桐壺更衣に桐壺帝のご寵愛を奪われた
 お恨みが、源氏の君への憎しみとなり、たまたま弘徽殿太后お妹君の朧月夜の君のもとへ、
 源氏の君がひそかにお通いなされているのを見とがめられ、太后さまのお怒りを買われて、
 とうとう源氏の君みずから、流人同様に須磨へ下られたのでございました。
 須磨での侘しいお暮らしが一年ほど続いたあと、前の播磨の国司、明石入道が源氏の君を
 明石へお迎えしてお世話申しあげ、入道のたつての願いもあり、入道のたつたひとりの大事
 な姫君明石の上（明石の姫君）と契りを結ばれて、明石の上はご懐妊なされたのでございます
 が、その喜びも束の間、須磨へくだられてより二年半の後、ようやく朱雀帝のお許しが出て、
 都へお帰りになることになったのでございました。お身をつつしまれて蟄居なされてい
 た源氏の君は、明石の上を都へお連れなされるのをはばかりれて明石の上を明石へ置かれ、悲
 しいお別れをなされての旅立ちにございました。

源氏の君が都へお帰りになられると、すぐに朱雀帝は御讓位なされて、源氏の君と藤壺中
 宮のお子である東宮が冷泉帝に即位され、ときを得られた源氏の君はたちまち内大臣に昇進
 なされて、またたく間に三年近くの歳月が流れ、源氏の君のご境涯も、世のひとが目をみは



るくらい、華やかにお変りなされていたのでございます。お若い冷泉帝のご後見役として、政治の実権を握られ、内にはご成人なされた紫の姫君を妻になされてご夫婦仲も睦まじく、我が世の春を謳歌なされておられる源氏の君でございました。

この日、二條院は暁け方から、牛車の音や雑仕の声などが入り乱れ、ひととき賑やかな活気に満ちておりました。今日は亡き六條御息所の姫君で前の齋宮であられた梅壺女御（のちの秋好中宮）が、冷泉帝のもとへご入内なさる日なのでございます。

二條院の奥のお部屋では、紫の上のお指図で、侍女達が女御のお支度の真最中、おぐしをすく者、ご装束をおつけする者、香を焚き

しめる者など、みなあわただしく立ち働く中に、

「おかみのお歸りにございます」

とふれながら、侍女が小走りに駆け込んで参りました。

その後を源氏の君が急ぎ足で入って来られます。

「紫ッ、支度^{したく}は出来たかッ」

とおっしゃられて梅壺女御をごらんになると、思わず息を吞まれました。金糸銀糸で縫^{ぬい}とりした藤襲^{ふじがさね}のご装束の見事さもさることながら、それをお召しになられた梅壺女御の気品あふれる繊細^{せんさい}なお美しさ。さすがに当代一の貴婦人であられた、高雅^{こうが}な御息所の忘れ形見だと源氏の君は感激なさるのです。

「六條御息所さまがおられるのかと思うた」

源氏の君の様子をごらんになられて、紫の上が、

「やはり母君にお似ましにございますか」

と問われますと、

「ああ、お顔立ちはいささか違うても、におい立つものは御息所さまそのままだ」

源氏の君は、梅壺女御の白い華奢^{きゃしゃ}な手をおとりになつて、

「なにやら昔に立ち戻つて、御息所さまにおめにかかっているような懐かしさにございます」
早くも目をうるませていらつしやいます。梅壺女御は、

「こたびの入内じゆだいのこと、なにからなにまで紫の上さまにお心づかいいただきましてござい
す。お礼の言葉もございませぬ」

と頭をお下げになられます。

「先年、御息所みよすんどころさまがお亡くなり遊ばされましたが、姫さまのことは、ご生前の折より、こ
の源氏に頼むとのご遺言ゆいごんにございました。帝がおかわりなされて、ようやく伊勢いせいの齋宮さいぐうのお
役目を果たされ、都へお戻りなされたときから、冷泉帝へご入内の儀、取りはかろうて参り
しました。また、御息所さま亡きあと、姫さまにはお身寄りがありなされませぬ。ふつつか
ながら、我らが親代りをつとめさせていただき、御息所さまに代って、ご入内のお支度をさ
せていただきましてございます」

源氏の君のお言葉に熱心に耳を傾ける梅壺女御をごらんになりながら、紫の上は、

「源氏の君さまは、まるでまことのお子こがご入内遊ばすように、こまかいことにまでお心を
つかわれ、梅壺女御さまに肩身のせまい思いをおさせせぬように……他の女御さまがたに退ひ
けをとらぬようにと、それはうるそうて……」

と笑いながらおっしゃいます。梅壺女御は、

「亡なくなりました母とて、どれほど喜んで下されておりましたようか……」
「ご存命ぞんめいであられたらもう」

源氏の君は、思わず涙を抑えられて、

「姫さまのお里邸さとていはこの二條院にございます。我らを親と思われて……」

紫の上も、

「どのようなお世話とてさせていただきます。お心おきのう……」

お二人で、梅壺女御をおいたわりなさるのでございました。言葉もなく涙ぐんでうなずかれる女御にようごに、源氏の君は、

「おお、帝がお待ちかねであらう。冷泉帝は姫さまよりお年下におわします。父帝桐壺院は既に崩御ほうぎょなされ、母君藤壺中宮さまもご出家なされて、おそばにはおられませぬ。お淋しいおかたにございます。ようお慰め申しあげて下さいませ」

そのお言葉を真剣な面持ちでお聞きになられて、梅壺女御は静かにうなずかれます。

こうして、前の齋宮さいきであられた六條御息所の姫君、梅壺女御は、源氏の君のご後見で冷泉帝の後宮こうきゆうにご入内じゅだいなされたのでございます。

さて、道長さまは、私が源氏の君のご栄達えいたつにばかり心を奪われていると少々ご不満のようでございます。明石に置き去りにされた姫君のことがなによりお氣にかかっていらつしやるのでございましょう。

私とて、明石の姫君のことは、このまま捨て置くつもりなど毛頭もうとうございせんでした。

もちろん源氏の君もそのように薄情はくじやうなことはなさりますまい。

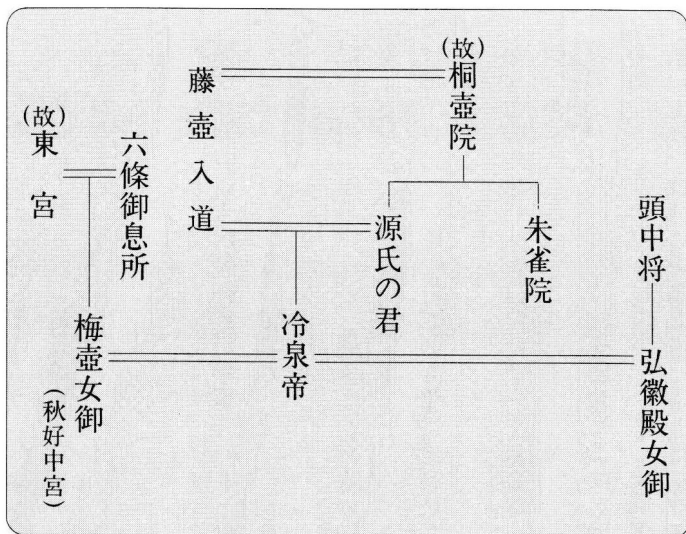
焦あせられておられる道長さまのため少し先を急いで、明石の姫君のお身の上に筆を進めて参りましょう。

梅壺女御のご入内の御儀が無事終わり、お若い帝も女御のしっとりとしたお美しさにすっかりご満足なされたようでございます。源氏の君も紫の上もホッと肩の荷を下ろされた心地で、二條院へお戻りになりました。

「姫の入内も無事すんで、機嫌よう梅壺の局つぼねへおはいりなされた。これで御息所さまとお約束も果たし、ひとつ肩の荷を下ろしたわ。そなたには礼を言う。入内の支度、ようしてさしあげて下された。そなたでのうてはあれほどの気配りはかなわなんだ。私も親代りとして面目めんめくをほどこしたわ」

「あなたのお思い入れはただごとではございませなんだ。六條御息所ろくじやうのみやすんどころさまにはよほどの思いがおりになるのでございますなあ」

紫の上うらがほんの少し皮肉をこめておっしゃいますと、源氏の君は真剣なお顔で、
「ああ……。罪滅つぐなぼしとでもいうか……。随分つらい思いもおさせした。せめてもの償つぐないじゃ」
紫の上はご自分のお櫛くしの箱にふと目をやられ、



「それにしても、御息所さまの姫さまには、朱雀院が深いご執心しゅうしんとうかごうておりました。弟君の冷泉帝に入内なされては、院のご失意しつゐが察せられて……おいたわしうございませす」

朱雀院が女御にお櫛の箱を贈られたとき、お歌が添えられてあったのを、紫の上もお聞きになっていらしたのでございます。

源氏の君も朱雀院のお悲しみには心を傷いためておられましたが、その思いを振り切るように、

「致しかたあるまい。院は退位なされたおかつ……これからお力を持たれるは冷泉帝じや。

冷泉帝には既に左大臣家の頭中將さだいじんけ とうのちゅうじょうの一の姫が弘徽殿こうきでんへはいられ、弘徽殿女御として入内なされておる。このまま手をこまねき、弘徽殿女御に男御子おとこみこでもお生まれなされて、中宮